

『十六夜日記』 「路次の記」 の和歌表現―歌枕を指標として

坂井伸子
深見聡

一、はじめに

『十六夜日記』は、鎌倉時代中期に阿仏尼が著した日記紀行文学作品である。夫藤原為家の死後、実子為相と先妻の子為氏との播磨国細川庄をめぐる領地相続争いの訴訟のため、弘安二年（一二七九）一〇月一六日に京都から鎌倉に下ったときの日記である。序、京からの紀行文、鎌倉滞在の記、鶴岡八幡宮奉納の勝訴祈願の長歌から成る。^(注2)

『十六夜日記』 「路次の記」 は、旅の記述であるため地名が多く書かれ、その中には歌枕も多い。また、阿仏尼は歌道家である藤原為家の晩年の正妻であるという立場も注目され、歌枕詠を中心に分析されてきた。風巻景次郎氏は、『十六夜日記』が書かれた理由に関して、「阿仏尼の唯一の目的は名所の歌のよき見本を作るということに存したのである」と述べる。^(注3) 今関敏子氏も歌枕という側面に着目し、次のように論じる。

時間の進行と空間移動が実に納得行く様に整合している。^(中略) 『十六夜日記』は、歌枕を辿る類型的な紀行である。^(中略) 明確な旅の目的と行程、都回帰の姿勢と歌枕を訪ねる類型表現は、紀行の典型であり、流浪とは全く無縁の制度的な旅の表現である。^(注4)

だが三角洋一氏が、『十六夜日記』の評価をめぐっては、^(中略) 交差するいくつかの価値軸の間で、大きな振幅で評価が揺れ続けてきた事実がある^(注5)と述べるように、『十六夜日記』は様々な評価がなされてきた。例えば、長崎健氏は「路次の記」を分析し、次のように結論づけている。

名所題としての地名詠ではなくて、旅の途次での折からの関心による、かなり恣意的なものであって、名所和歌そのものとして詠みだされているものではない。結論すれば、それは旅程の報告と、旅ゆく者の述懐の詠歌であったといえるだろう。^(注6)

『十六夜日記』の地名詠は、名所歌枕の見本として捉える立場や、そうではなく旅の述懐詠とみる立場などから、様々な見方がなされてきたと言えよう。

そこで本稿では、『十六夜日記』の紀行部「路次の記」に登場する地名について、歌論書や紀行文との比較を行いつつ、『十六夜日記』「路次の記」における地名詠の特徴を再考していきたい。「路次の記」には、伝統的な歌枕とは見なし難い新奇な地名を詠んだ歌が散見されるが、阿仏尼はなぜ伝統的歌世界から逸脱した地名を詠歌し、日記に書き残したのか。「路次の記」における地名詠の特徴を考察していくことで、和歌史・表現史における『十六夜日記』「路次の記」の特色・意義がより明らかになるのではないかと考える。

考察の前に、まずは「歌枕」そのものについて確認しておきたい。奥村恒哉氏は、歌枕とは、「和歌に詠まれる特定の地名」とした上で、次のように位置づける。^(注7)

最初にある地名がある歌人に詠まれ、それが勅撰集に入る。以降、多数の歌人に詠みつがれていくうちに、固有の情緒が付着する。それが文学史の中で成長し、やがて固定する。その情緒が付着した地名が歌枕である。個々の情緒が付着すると、吉野は桜、竜田は紅葉のごとく、個々の景物が固定する。読者は、特定の歌枕に接すると、

いながらにして歴史的に形成された豊かな情緒を感じることができる^(注8)

また、片桐洋一氏は「歌枕」を次のように定義する。

単に和歌に用いられるというだけではなく、まさに歌の枕と称するにふさわしく和歌表現の前提となり、一首全体を統括する重要な歌ことばであった^(注9)

歌枕は「固有の情緒が付着」した一種の「歌ことば」であったと理解される。『十六夜日記』「路次の記」にも多くの歌枕が見出されるが、一方で歌枕とは見なし難い地名も多く記される。その特徴と意義を明らかにしていきたい。

なお、『十六夜日記』の本文は、九条家旧蔵本・松平文庫本を底本とする岩佐美代子校註・訳「十六夜日記」(新編日本古典文学全集48『中世日記紀行集』)に拠り、^(注10)頁数を附した。また、以降本稿における本文引用は、「源氏物語」「信生法師日記」は、『新編古典文学全集』に依拠し、巻数・頁数を附した。さらに、「夜の鶴」「四条局仮名諷誦」は、『校註 阿仏尼全集』に依拠し、表記の一部を私に改めた。

二、歌論書・紀行文との比較

まず、『十六夜日記』「路次の記」に登場する地名について

表1 『十六夜日記』 「路次の記」に書かれた地名と歌論書に登場する地名との比較

地名/作品名	能因歌枕	和歌初学抄	興義抄	八雲御抄	歌枕名寄
粟田口	/	/	/	/	/
逢坂	○	○	/	○	○
野路	/	/	/	/	○
鏡	○ (鏡山)	○ (鏡山)	/	○	○ (鏡山)
守山	○	/	/	○	○
野洲川	/	○	○	○	○
小野	○	/	/	/	○
醒が井	/	/	/	/	○
藤川	/	/	/	○	○
不破	○	○	/	○	○
笠縫	/	/	○	/	/
平野	/	/	/	/	/
結ぶの神	/	/	/	/	/
洲俣	/	/	/	/	/
一の宮	/	/	/	/	/
下戸	/	/	/	/	/
熱田の宮	/	/	/	/	/
鳴海	/	/	/	○	○
二村山	/	○	/	○	○
八橋	○	○	/	○	○
宮路山	○	/	/	○	○
渡津	/	/	/	/	/
高師	/	○	○	/	○
浜名の橋	○	○	/	○	○
引馬の宿	/	/	/	/	○
浜松	/	/	/	/	/
天中の渡り	/	/	/	/	/
見附	/	/	/	/	/
小夜の中山	/	○	/	○	○
ことのままといふ社	/	/	/	/	/
菊川	/	/	/	/	/
大井河	/	○	/	/	○
宇津の山	/	/	/	○	○
手越	/	/	/	/	/
藁科川	/	/	/	/	/
興津	/	○	/	/	○
清見が関・清見湯	/	○	/	○	○
富士	○	○	○	○	○
波の上	/	/	/	/	/
田子	○	○	○	○	○
伊豆の國府	/	/	/	/	/
三島の明神	/	/	/	/	○
箱根	○	○	○	○	○
湯坂	/	/	/	/	○
早川	/	/	/	○	○
鞠子川	/	/	/	/	/
酒匂	/	/	/	/	/

確認しておきたい。表1・表2は、歌論書・同時代の紀行文等十二の文献における他出の有無をまとめたものである。

表2 『十六夜日記』『路次の記』に書かれた地名と同時代の紀行文に登場する地名

地名／作品名	海道記	東関紀行	信生法師日記	うたたね	春の深山路	覧富士記
粟田口	△	/	/	/	△	/
達坂	△	◎	◎	◎	◎	◎
野路	/	◎	/	△	△	/
鏡	/	◎	◎	◎	◎	◎
守山	/	/	/	/	/	/
野洲川	/	/	/	/	/	◎
小野	/	/	△	/	/	◎
醒が井	/	△	/	/	△	◎
藤川	/	/	/	/	◎	/
不破	/	△	/	◎	◎	◎
笠縫	/	/	/	/	△	◎
平野	/	/	/	/	/	/
結ぶの神	/	/	/	/	/	/
洲俣	/	/	/	△	△	△
一の宮	/	/	/	/	/	/
下戸	/	/	/	/	/	◎(下津)
熱田の宮	△	△	/	/	△	◎
鳴海	△	◎	◎	◎	◎	◎
二村山	◎	◎	/	/	◎	◎
八橋	◎	△	△	△	△	◎
宮路山	△	△	◎	/	/	/
渡津	/	/	/	/	/	/
高師	◎	◎	/	/	/	/
浜名の橋	△	◎	◎	△	/	◎
引馬の宿	/	/	/	/	/	◎
浜松	◎	/	/	/	/	/
天中の渡り	◎	△	/	/	/	/
見附	/	/	/	/	/	/
小夜の中山	◎	◎	◎	/	/	◎
ことのままといふ社	◎	◎	/	/	/	/
菊川	◎	◎	◎	/	/	/
大井河	△	◎	/	/	/	/
宇津の山	◎	◎	◎	/	/	◎
手越	△	/	△	/	/	◎
薬科川	/	/	/	/	/	/
興津	△	◎	/	/	/	/
清見が関・清見湯	◎	◎	△	/	/	◎
富士	◎	◎	◎	△	△	◎
波の上	/	/	/	/	/	/
田子	/	△	/	/	△	/
伊豆の国府	/	△	/	/	/	/
三島の明神	/	◎	/	/	△	/
箱根	/	△	/	/	△	/
湯坂	/	/	/	/	/	/
早川	△	/	/	/	/	/
鞠子川	/	/	/	/	/	/
酒匂	/	/	/	/	△	/

一、歌学書は『日本歌学大系』に拠る。ただし、『歌枕名寄』については『新編国歌大観 第十卷』、日記紀行等は『新編日本古典文学全集』に依拠した。また、『うたたね』は、『校註阿仏尼全集』に拠った。

二、他出の有無を、有(○)無(／＼)の記号で記し、和歌に読み込まれている場合は「◎」、地の文の記載のみの場合は「△」とした。不通過は、空欄とした。

三、『十六夜日記』「路次の記」本文で和歌に詠まれている地名は、太字とした。

〈補注〉

注1 各歌学書において、中世東海道諸国にあるとされたもののみを対象とする。同じ地名でも明らかに比定地が異なる場合は、／とする。

注2 「隅田川」「長柄の橋」「足柄の山」「伊豆の大島」「鎌倉」など、実際に通過していないと考えられる地名については紙幅の都合上別稿としたい。

注3 表の分類項目として、今回は地名を基準とした。よって、「鏡」と「鏡山」は別の景物と考えられるが同じ「鏡」という地名で一括とした。以下、逢坂、鳴海、高師、清見、富士、箱根等、同様の取り扱いとした。

表1、2から明らかになったことを確認しておく。まず、歌論書全てが歌枕として取り上げる地名は「富士」「田子」「箱根」だが、いずれも『十六夜日記』「路次の記」に記述があり、和歌も詠まれている。一方で、他作品の多くが歌枕として取り上げる「鏡」は、『十六夜日記』においては詠歌されていない。また「浜名の橋」では、和歌は詠んでいるが地名が詠み込まれていない。「鏡」「浜名の橋」は歌枕と見なし得る地名であるにもかかわらず、『十六夜日記』ではなぜ詠歌されていないのだろうか。さらに『十六夜日記』「路次の記」には、「醒が井」「菊川」などのように、歌論書にも同時代の紀行文にもほとんど見られない新奇な地名があることが分かる。こうした地名は新見性があり注目される。

以上のように、『十六夜日記』「路次の記」には、歌論書や他作品と共通する点と相違する点が見られる。これらの地名を記述する際に、阿仏尼はどのような表現をしているのか。次節以降で、地の文の記述や和歌の実作を具体的に分析していきたい。

三、伝統的な歌枕における和歌表現

まずは当時歌枕と考えられていた地名を記した、「路次の記」

の表現について分析を行う。

どの歌論書にも出てくる地名は、古来和歌に詠まれてきた歌枕と考えてよい。表1よりすべての歌論書で歌枕であると認識されていたと考えられる地名は

i 富士

ii 田子

iii 箱根

の三つとなる。『十六夜日記』にもこの三か所の記述はあり、それぞれで和歌も詠んでいる。

i 富士

富士の山を見れば、煙立たず。昔、父の朝臣に誘はれて、「いかに鳴海の浦なれば」など詠みし頃、遠江国までは見しかば、富士の煙の末も、朝夕たしかに見えしものを、「いつの年よりか絶えし」と問へば、さだかに答ふる人だになし。

①誰か方になびき果ててか富士のねの煙の末の見えずなるらむ

古今の序の言葉とて、思ひ出でられて、

②いつの世の麓の塵か富士のねの雪さへ高き山となし
けむ

③朽ちはてし長柄の橋を作らばや富士の煙もたたずな

りなば

今夜は波の上と□の宿りて、荒れたる音左右に、目も合はず。

廿七日、明けはなれて後、富士河渡る。朝川いと寒し。数ふれば十五瀬をぞ渡りぬる。

④さえわびぬ雪よりおろす富士河の川風氷る冬の衣手
(二八三―二八四頁)

地の文では、以前父に誘われて富士を見たことを思い出して、その際見えた煙が今は見えないため、周りの人に「煙が絶えたのか」と尋ねる様子が描かれている。和歌だけでなく地の文でも「煙」に言及し、短い文章中、四か所に「煙」という言葉が使われていることにより、特に「煙」の様子に注目していることがわかる。「富士」は駿河の国の歌枕とされ噴煙を上げている時期もあった。そのため平安期には恋の歌として詠まれることが多く、その場合は「思ひ」に「火」を掛け、「煙」の縁語として詠む技巧が常套的である。^(注11)①の和歌は、「なびき」は、煙が「なびく」と恋人に「なびく」が掛詞であり、係り結びと擬人法が使われている。地の文では、引き続き『古今集』仮名序に言及し、和歌を二首詠んでいる。②の和歌では「麓の塵」から『古今集』仮名序の「高き山も麓の塵泥よりなりて」の部分が想起される。富士山の高さに驚

いたという心情を詠みながら、古くからの歌枕を意識し、後世の模範となる勅撰集『古今集』仮名序を想起させる言葉選びは、伝統の世界と、私的感情を重ねて表現するための工夫と理解することができる。さらに、③の和歌には、「長柄の橋」という言葉を用いている。これは『古今集』仮名序にある「今は富士の山の煙立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰め^(注12)ける」とあるのを踏まえている。即ち、以前煙が立ち昇るのをこの目で見た富士山の噴煙が、『古今集』仮名序のように、今眼前に噴煙が昇らない事実がある。しかし、『古今集』仮名序のように、富士の煙が立たず、長柄の橋が尽きたことを嘆いて歌を詠んでも仕方がない。むしろ、この逆を行けば、富士の煙ももう一度立ち上るのではないかと考え、③の和歌のように、「朽ち果ててしまった長柄の橋をもう一度作りたいものだ。富士の煙も立たなくなったのなら」と和歌を詠んだ。つまり、「長柄の橋を復活させれば、富士の煙も再び立ち昇るのではないか」という期待を込めた歌であると解釈できる。『古今集』仮名序の「つくる（尽くる）」を「つくる（作る）」に読み替える機知や、『古今集』仮名序のように復活を諦めて歌に沈潜するのではなく、積極的に「長柄の橋」を再建し、合わせて富士の煙も復活させようとする強い意志が現れているとみるべきであろう。実に前向きな阿

仏尼らしい詠歌であるといえよう。また、富士河では川の寒さ、旅のつらさが地の文で述べられ、さらに和歌では、富士河の川風が富士山の雪からおりてくるため旅衣が凍る様子を詠い、旅の厳しい様子が描かれる。

「富士」という古来から歌枕として認識されてきた地名において、阿仏尼は「富士の煙」や『古今集』仮名序など伝統的な世界を踏まえながら、自身の感懐が織り込まれた和歌を詠んでいる。だが一方で、「煙」という語は用いながらも、「煙たたず」「煙の末の見えず」などのように、その内容は煙の存在しない富士である。また「富士河」では、地の文に「朝川いと寒し。」と記述があることから、東海道の旅での実体験が基盤にあり、そこに「さえわびぬ」という旅愁ともとれる率直な感懐が詠われている。

ii 田子

今日は、日いとうららかにて、田子の浦に打ち出づ。海人どもの漁するを見ても、

⑤心から下り立つ田子のあま衣干さぬ恨みも人にか
こつな

とぞ言はまほしき。

(二八四頁)

前日の富士河の渡河の様子とは異なり、地の文からは「うららかな」な「田子の浦」の様子が描かれる。「恨み」は「浦見」

と掛詞であり、「裏」と「乾す」は衣の縁語であり、修辭技巧が使われる。また、「下り立つ田子」から、次の和歌が想起される。

袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづ
からぞうき
六条御息所

『源氏物語』②葵 三五頁

自らの意思で選んだ道ながら、つらい思いをしている身上を嘆いている点で心情が共通している。阿仏尼は、『源氏物語』の講師を務めており、その知識の深さはよく知られている。六条御息所が詠んだ和歌の「下り立つ田子」の「田子」（農夫）を歌枕である「田子の浦」の「田子」に転換させている。

阿仏尼の歌は、地名の「田子」を「下り立つ田子」と詠み、『源氏物語』の伝統の世界を想起させることにより、旅先での旅愁をより美しく描き出そうとしている。

iii 箱根

廿八日、伊豆の国府を出でて箱根路にかかる。いまだ夜深かりければ、

⑥玉くしげ箱根の山を急げどもなほ明けがたき横雲の
空

足柄の山は道遠しとて、箱根路にかかるなりけり。

⑦ゆかしさよそなたの雲をそばだててよそになしつる
足柄の山 (二八四～二八五頁)

二十八日も、暗い早朝の出発であることが記される。⑥の和歌の「玉くしげ」は「箱」の枕詞である。また、旅の道筋としては「足柄」は通過していかないにもかかわらず、古來和歌に詠まれてきた歌枕「足柄」について言及し、和歌にも詠み込んだうえで、「ゆかしさよ」と強調している。息子の為に鎌倉へ急ぐ旅で無ければ、遠回りでも、万葉の昔から歌に詠まれた有名な地名で、今様や更級日記等にも出てくる「足柄」の山や峠を通ってみたいと思ったのに、その有名な歌枕を目にすることが出来なかつたことを残念に思う気持ちを詠んだものである。「足柄」の先行歌で「ゆかしさよ」という言葉で心情を表した作は、管見の限り見出せない。それほど『十六夜日記』の鎌倉下りの道は、息子への母親の情一筋の旅であったといえよう。⑦の和歌からは、息子の為の急ぎの旅であるという『十六夜日記』の特性と、子を思う作者の心情をうかがい知ることができる。

ここまで、当時歌枕として共通理解されていたと考えられる地名、「富士」「田子」「箱根」について分析をおこなった。『古今集』や『源氏物語』など、和歌の世界で重要視されている作品群を意識したり、古來歌枕として有名な「足柄」を

詠み、古典主義的な知識教養を重視しながら、自身の心情を述べる表現が多いことがわかった。一方で、煙の立たない富士をことさら強調するなど、伝統にとられず当地の風景描写を重んずる記述があることは留意しておきたい。

一方で、歌論書や同時代の紀行文が歌枕と認識していたと考えられる地名、「鏡」や「浜名の橋」は、「路次の記」において歌に詠まれていない。「鏡」は地の文には取り上げられているものの、「といふところ」という言い回しがなされており、あくまでも伝聞的な取り扱いで詳しい記述もなされておらず、和歌も詠まれていない。また、「浜名の橋」の記述は次のようになっている。

浜名の橋より見渡せば、鷗といふ鳥、いと多く飛びちがひて、水の底へも入る、岩の上にも居たり。

⑧ 鷗ある洲崎の岩もよそならず波の数こそ袖にみなれて
て
(二七九〜二八〇頁)

地の文では言及されているものの、「浜名の橋」という地名が和歌の中に詠み込まれておらず「かもめ」が詠み込まれる。

おそらく『十六夜日記』『路次の記』においては、古来和歌に詠まれてきた名所であっても、心情の揺れ、旅のつらさや神への祈りなどがなければ、和歌を記さない。さらに、「浜名の橋」の記述からわかるように歌枕と考えられる地名であって

も自身の心情を表現するのに「かもめ」という素材がより適切だと判断した場合には、伝統的な歌枕であっても「浜名の橋」は和歌には詠まずに、「かもめ」という素材を選択するということがわかる。

以上のように、歌論書や同時代の紀行文との比較により、当時の人々に、より強く認識されていたと考えられる歌枕について分析を行った。その結果、阿仏尼の和歌は、伝統的かつ古典主義的な知識を織り込む一方で、東海道を旅する折に目にした風景・景物を基盤としながらそこに私的情感を重ねていく実情詠でもあることがわかった。また、古来名所として詠われた地名であっても、自身の心情にあわない場合や、その地での心情を表すのにより適した素材が他にある場合には、その地名は和歌に詠み込まれない。つまり、単に伝統的な歌枕を重視したというだけではなく、自身の心情の表現を最重要視していることに注目したい。

四、 新奇な地名における和歌表現

次に、他作品で取り上げられることが少ない新奇な地名について考察する。分析するにあたっては、同時代の紀行文で「◎」が一つ以下のものを対象とした。また同時代の紀行文

に同じ地名の記述がある場合には、比較を行い、その差異について考察する。

次に挙げるのは「醒が井」を詠んだ歌である。

⑨ 結ぶ手に濁る心をすすぎなばうき世の夢や醒が井の水
(二七五頁)

「醒が井」は、歌論書では『歌枕名寄』、紀行文では『覽富士記』しか取り上げておらず、歌枕として定着していたとは言い難い。⑨の歌では、地名の「醒が井」に「(現世への執着から)醒める」の意が掛けられている。また「濁る」と「水」は縁語である。現世での悩みを「醒が井」の清らかな水で洗い流してしまいたいとする阿仏尼の心情を表現している。新しい地名を用いながら、私的感情を詠んだ述懐歌といえる。次に「菊川」での歌を確認する。

⑩ 渡らむと思ひやかけし東路にありとばかりはきく川の
(二八一頁)

「菊川」は、歌論書には登場しない地名である。同時代の紀行文では、『海道記』『東関紀行』『信生法師日記』に「菊川」での記述が見られる。三作品とも和歌を詠んでいるが、「菊川」という地名が和歌に詠み込まれているのは、『信生法師日記』のみである。⑩の阿仏尼の歌は、地名の「菊川」に「(あるとばかり)聞く」の意を掛けている。東海道にある「菊川」を

渡ることになるとは思いもしなかった、という阿仏尼の感嘆や驚きにも似た感情が詠まれている。個別的な体験を詠むという点では、⑨の和歌と通底しているよう。なお『信生法師日記』では次のように詠まれている。

菊川に露の情を留め置きてはかなき名をも流しける
かな
信生法師
(『中世日記紀行集』「信生法師日記」九二頁)

承久の乱の後、関東に護送されることとなった藤原宗行が、この菊川で斬られることとなったエピソードを取り上げ、そのはかなさを嘆く和歌となっている。「流し」は川の縁語である。同時代の紀行文は、いずれも宗行卿のエピソードに触れ、和歌を詠んでいる。しかし、阿仏尼は、あえてそのようなエピソードには触れず、眼前の景と個人的な感情をシンプルに詠んでいる。

「醒が井」「菊川」ともに、地名と別の言葉が掛詞になっていたが、この傾向は他の新奇な地名にも共通する。「路次の記」において古くからの歌枕と見なし難い地名は十四あるが、そのうち九首に、地名を用いた掛詞があった。新奇な地名を和歌に詠む際は、その地名が掛詞となり得ることが肝要であった可能性が高い。また、掛詞が使われていない和歌を分析すると、次のような特徴が見られた。一つは「祈りの和歌」と

もとれる阿仏尼の思いが詠まれる和歌、もう一つは、純粹に情景を詠む和歌である。

「藤川」や「一の宮」は、阿仏尼の思いが詠まれる地名である。

十八日、美濃国、関の藤川渡る程に、まづ思ひ続けらる。

⑩ 我が子ども君に仕へんためならば渡らましやは関の藤川
(二七五頁)

⑪ の和歌について、岩佐美代子氏は次のように指摘する。

亡夫為家のためにこそこの旅に出発したのだという、阿仏の意識の強調と見ねばならない。(中略)為家への思いを如実に示すとともに、後述する旅の喜び―図らずもゆかり深い地に立った感動を鮮やかにうたいあげており、本記に対する既成観念の転換を促す一契機となる。^(注14)

「藤川」は、藤原定家が官位の停滞を嘆いて詠んだ「藤川百首」巻頭歌以来、為家も和歌を詠んでおり、御子左家には縁が深い地名である。^(注15) そのような場所で、阿仏尼の決意表明もとれる和歌を詠むことにより、読み手に強いインパクトを与えている。また、「一の宮」では次のような記述がある。

又一の宮といふ社を過ぐとて、

⑫ 一の宮名さへなつかし二つなく三つなき法を守るなるべし

⑫ の和歌からは、『法華経』方便品の偈「十方の仏土の中には、唯だ一乗の方のみありて、二も無くまた三も無し」が想起される。^(注16) 阿仏尼が、為家の五七日の追善供養の際に記した『四条局仮名諷誦』には、為家の様子が「世を遁れ、真の道を尋ねて、二もなく三もなき一乘法華の行者、日毎に読誦を積むこと二千七百余部、病の床、臨終の際まで、念仏怠ることなし」^(注17)と書かれ、『法華経』を重んじる様子が看取される。

旅の途中で和歌を奉納し、神の守護を祈願したものであるが、それだけではなく、為家への思いとともに深い信仰心が見てとれる。以上のように⑩⑫の和歌に関して詳しく分析すると、いずれも為家に対する思いが込められている。これは『十六夜日記』の主題にも関わる内容であり、それらがあえて新奇な地名で詠まれていることに注目したい。最後に、「湯坂」を確認する。

いと険しき山を下る。人の足もとどまりがたし。湯坂とぞいふなる。辛うじて越え果てたれば、麓に早川といふ川あり。まことにいと早し。木の多く流るるを、「いかに」と問へば、「海人の藻塩木を浦へ出ださむとて流すなり」と言ふ。

⑬ 東路の湯坂を越えて見渡せば塩木流るる早川の水
(二八五頁)

当該歌は、掛詞は使われていない。また、⑨や⑩の和歌のように個人的な感懐も述べられていない。詠まれるのは東路の風景であり、その地でしか見られない独特な情景である。地の文には「辛うじて越え果てたれば」とあり、旅の難儀が伝わる。そのあとに川の名前や状況、木が多く流れている様子について説明していくような会話文が描かれている。阿仏尼はその珍しい情景に驚き、その感動を歌に込めたと考えられる。古来歌枕としては馴染みの薄い地名だからこそ、伝統の世界から離れ、目の前の実景の感動を、より印象的に読み手に伝えようとする阿仏尼の姿勢がうかがえる。

以上、同時代の紀行文との比較を通して、古来歌枕として和歌に詠まれることが少なかったと考えられる地名について分析を行った。阿仏尼は、古来和歌の世界では馴染みが薄いと考えられる地名でも、積極的に詠歌している。そうした新奇な地名を詠み込む場合、多くに掛詞が用いられていた。歌枕でなくとも、地名が持つ音の響きが自己の心情を表現するのに有効であれば、積極的に新奇な地名を歌に詠み込んでいったと言えよう。掛詞には「景物」と「心情」を引き寄せる効果がある。^(注18) 掛詞を使った和歌を詠むことで、その風光と阿仏尼の心情をより引き寄せ、印象付ける効果があると考えられる。

また掛詞がない場合でも、阿仏尼の「祈り」に近い強い思いを和歌にのせて詠んでいる。和歌は「祈り」を形にしたものであり、^(注19) 歌枕でなくてもその地名が自身の心情をのせるのにふさわしいと判断した場合には、あえて意図的に和歌を詠んでいると考えられる。

希少ではあるが「湯坂」のようにその風光に感嘆した詠もみられた。その場合、地の文には感興を覚えた情景やそれに関する会話文が描かれ、旅の状況がよりわかりやすく読み手に伝わるように工夫されている。伝統的な歌枕に捕らわれず、その地でしか見ることのできない風景に価値を見出し、そこに自身の心情を重ねていこうとする阿仏尼の態度が見出せる。

五、おわりに

以上、本稿では『十六夜日記』『路次の記』における地名に関して、歌論書や紀行文と比較しつつ、考察してきた。その結果、古来和歌に詠まれてきた名所である歌枕を意識し、伝統を踏まえて記す一方で、伝統的な歌枕であっても和歌が詠まれていない場合や、紀行文等でも取り扱われることが少ない地名を詠むケースがあることが判明した。歌道家の妻という立場を意識してか、『古今集』や『源氏物語』などの先行文

学を意識した記述をしながらも、煙のない富士を強調したり、父や夫に関することを記したりと、伝統に捕らわれることなく、個人としての体験・心情を重視しているようである。あえて和歌の伝統から外れる景物を組み合わせ、柔軟に和歌を詠むケースや、心情に合わない場合にはたとえ伝統的な歌枕であっても詠歌しない姿勢が見出せた。

一方で、古来歌枕として馴染みが薄い地名であっても、自身の心情を表現するのに適した地名や、風景の美しさや珍しさから感情に揺れが生じた場合であれば、その地名を和歌に詠んでいる箇所も存した。また、「路次の記」において新奇な地名が詠歌される場合、地名が他の語と掛詞になっているケースが多くあった。地名の持つ音の響きを重視していたと言えよう。

為家への思いに関しては、その「祈り」にも似た感情から、心情を表現するのにより価値があると思われる風景や情景があった場合にはその都度和歌を詠んでいる。

一方で、阿仏尼は作歌の心得を書いた自身の歌論書『夜の鶴』において、次のように述べている。

又、移り行く世々に従ひて、歌の姿もみな変り候にこそ。

「古への歌に今の歌を並ぶれば、火と水の如し。」など申して候へども、中比近き世の人々の歌も、昔の歌に自ら

劣らぬなどもや候らむ。又、古への歌のやさしく、如何なる世にも古り難く、面白くやさしき心詞をこそ、今の世にも上手と覚ゆる人々は好み詠みあはれ候めれば、昔今変るべきにも非^{注20}ず。

阿仏尼は、時代の変化によらない伝統の価値を認めつつも、時代の変化を感じ、新しいものに対しても古いものに劣らない価値があることを述べている。『十六夜日記』『路次の記』には、同時代の作品群にはほとんど見られない地名が多くあったが、これも『夜の鶴』に書かれた新しいものにも価値を見出す阿仏尼の姿勢を反映していると考えられる。

『十六夜日記』『路次の記』の地名詠には、歌枕の伝統を重視しつつも、題詠的な表現に捕らわれず、東海道の景観や風物を活写し、自身の心情を重ねて表現しようとする姿勢が見出せた。『十六夜日記』『路次の記』の和歌に見られる技巧や表現には、和歌史の上でも、題詠の時代から一步踏み出し、新しい地名に一つの評価を与えようとする阿仏尼の新見性が看取される。

注

(1) 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第一巻 二〇〇〇年 小学館 九二七

頁

- (2) 和歌文学大辞典編集委員会編『和歌文学大辞典』 古典ライブラリー 二〇一四年
- (3) 風巻景次郎「阿仏尼の文学―特に十六夜日記に於いて―」『国語と国文学』第六卷十号 一九二九年 二五一頁
- (4) 今関敏子『旅する女たち―超越と逸脱の王朝文学』 笠間書院 二〇〇四年 一六八―一六九頁
- (5) 三角洋一「訴訟の旅へ―『十六夜日記』」(特集・人はなぜ旅に出るのか―古代・中世文学に見る) 『国文学 解釈と鑑賞』第七巻三号 二〇〇六年 一一八頁
- (6) 長崎健・濱中修『行動する女性 阿仏尼』 新典社 一九九六年 一五五頁
- (7) 「歌枕」の項目担当は奥村恒哉『日本古典文学大辞典 第二版』 第一巻 岩波書店 一九八三年 二九四頁
- (8) 前掲注 7 二九五頁
- (9) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』 笠間書院 一九九九年 概説 vii
- (10) 諸本研究における九条家旧蔵本・松平文庫本の優位性については、玉井幸助『十六夜日記評解』「四、十六夜日記の成立と諸伝本」 一九五一年、岩佐美代子「九条家本十六夜日記(阿仏記)について」『国語・国文学』鶴見大学紀要第二十九号 一九九二年、久保貴子「『十六夜日記』考―『残月抄』における一考察―」『日記文学研究』第一巻 一九九三年によって肯首される。
- (11) 編者 久保田淳・馬場あき子『歌ことば歌枕大辞典』 角川書店 一九九九年 七五六―七五七頁
- (12) 小沢正夫・松田成穂校註・訳「仮名序」新編日本古典文学全集 11 『古今和歌集』 小学館 一九九四年 二四頁
- (13) 水川喜夫『飛鳥井雅有日記全釈』 風間書房 一九八五年 六一頁「嗟峨のかよひ」に、「源氏始めんとて、講師にとて、女主人を呼ばる。簾の内にて読まる。実に面白し。世の常の人の読むには似ず。慣らひあべかめり。」とある。
- (14) 岩佐美代子「『十六夜日記』はなぜ書かれたのか―」『国文学』 三巻二号 一九九三年 七五―七六頁
- (15) 岩佐美代子校註・訳「十六夜日記」新編日本古典文学全集 48 『中世日記紀行集』 小学館 一九九四年 二七五頁頭注
- (16) 前掲注 15 『中世日記紀行集』 二七六―二七七頁頭注
- (17) 梁瀬一雄『校註 阿仏尼全集 増補版』 風間書房 一九八一年 一八七―一八八頁
- (18) 五味文彦 田淵句美子 シュテファン・カイザー 古沢巖 山本真鳥 篠原徹 金田章裕 「ヘシンポジウム」特集 2 「知の役割 知のおもしろさ」を考える 人間文化研究の現代的意義『Human』 第一巻 二〇一一年 一〇一頁

- (19) 渡部泰明 『古典和歌入門』 岩波書店 二〇一四年 五〜六頁
- (20) 前掲注17 『校註 阿仏尼全集 増補版』 九九〜一〇〇頁

付記

本稿執筆にあたり、ご教示下さいました諸先生方に記して深謝申し上げます。

(さかい のぶこ・長崎大学大学院水産・環境科学

総合研究科博士後期課程・院生)

(ふかみ さとし・長崎大学)